

「生活作文の書き方教室」掲載作文使用条件

① 「生活作文の書き方教室」（以下「本サイト」）掲載作文の著作権は放棄しておりません。使用条件に同意した場合にのみ使用できます。

② 本サイトの作文は、学校（小学校および中学校）提出に限りその使用を認めます。

③ 本サイトの作文を使用し、何らかの問題が発生しても、本サイトおよび管理人は一切の責任を負わないものとし、すべて使用者の自己責任で対応するものとします。

④ 本サイトおよび作文に関しては、苦情とうは一切受け付けません。

⑤ 何かしらの問題が発生する可能性がある場合、判断した場合、使用は中止してください。

⑥ 本サイトの作文を他サイトへ転載することは厳禁です。

⑦ 本サイト掲載作文への直リンクは厳禁です。

以上

金魚すくい

五年二組

●●●●

●●祭りに、父と母と一緒に出掛けました。

お祭りの会場に着くと、ソースが焼けるに

おいがしました。このにおいをかぐと、お祭

りに来た気分になります。幼稚園に入園する

前、母が焼きそばを作ってくると、ソース

の焼けるにおいに「お祭りだ。お祭りだ」と

言っていたそうです。

わたしはお祭りが大好きです。たくさん

人が集まっているだけで、何かが起こりそう、

期待感がふくらみます。露店で買う食べ物

がすごくおいしいんです。お好み焼きもたこ焼

きも、それに焼きそばも、普段食べるそれと

は全然おいしさが違います。

リンゴあめにソースせんべい、お祭り

か食べられないものが露店を飾ります。それ

らを買ってもらうのも、お祭りの楽しみです。

でも、お祭りでは一番好きなのは、金魚すく

いです。金魚すくいに初めて挑戦したのは幼

稚園の年長のときでした。そのときは一匹も
 金魚をすくうことができず、お店の前で泣い
 た記憶があります。
 それ以来毎年お祭りでは金魚すくいにチャ
 レンジしましたが、連戦連敗でした。
 そして去年、初めて金魚をすくうことがで
 きました。ポイの上で暴れる金魚に向かって
 「暴れないで」と、お願いしていました。
 そして、おわんの中に無事金魚が入った瞬
 間、達成感に包まれました。何だか、少し大
 人になったようなうれしさもありました。
 去年のお祭りのあと、もろとたくさんの金
 魚をすくえるようになりたいと思いました。
 本やインターネットで、上手な金魚すくいの
 方法を調べました。
 「出目金は重いので、ポイが破れてしまっか
 ら狙ってはいけない」とか、「露店のおじさ
 んから丈夫なポイをもらうには……」とか、
 「ポイを水面に入れる角度は……」とか、
 「ポイの裏表を間違わないように」など、金

魚すくいいのワザわざに関するあれこれを収集しま
した。
「これだけ研究けんきゅうしたのだから、今年ことしは五匹ごびきは
固かたい」と、根拠こんこはないけど自信じゆんたっぷりぷりでし
た。金魚きんぎょすくいすくいの露店ろてんをめぐめぐり歩あいていまし
た。
ひとときお照明しやうめいが明るく、たくさんの人が群
がっている露店ろてんが目めに入いりました。そうです、
そこが金魚きんぎょすくいすくいのお店みせです。
はやる気持ちきもちを抑おさえるように深呼吸しんそくをして、
今まで研究けんきゅうしたことを一つ一つ復唱ふくしょうしました。
露店ろてんの前まえに着くと、水槽すいそうを一通り見渡みわたしま
した。ポケットから二百円にひゃくえんを取り出し、おじ
さんからポイポイをもらいました。
ポイポイをもらうにもコツコツがあつて、わたしの
ような子どもこどもや、きれいなおねえさんおねえさんだと、
丈夫丈夫なポイポイがもらえるとのことことです。
まず、ポイポイ全体ぜんたいを水みづにぬらしぬらします。こうす
ることでポイポイが破れやぶれにくにくくなります。ぬれて
いるところところとぬれていないところところがあると、

その境目が破れやすくなるのです。
そして、小さめの金魚に狙いを定め、水面
に対して三十度の角度でポイを入れます。金
魚の頭をめがけ、枠の近くで金魚をすくうよ
うにポイを動かします。
すると次の瞬間、金魚がヒットしました。
ポイの水を切るように斜めにした状態で水面
から引き上げ、そしておわんの中に金魚を入
れました。
金魚一匹すくっても、まだポイにダメージ
はありません。もう一度同じようにポイを水
面に入れ：：、また金魚がヒットしました。
次も、その次も、おわんの中には戦利品の金
魚が増え続けました。
五匹目をすくったところで、何となく周り
がざわついているのを感じました。そして視
線がわたしに注がれている、そんな気もしま
した。子どももわたしが五匹も金魚をすくっ
ているその姿に、いつの間にか注目されてい
たのです。

「それならば、一年勉強したワザを見せてあげよう」と、金魚をすくい続けました。一匹金魚をすくい上げるごとに、小さな歓声が起こります。そして十匹目の金魚がポイにのった瞬間、紙が破れてしまいました。すると同時に、大きなため息が流れたあと、拍手が起こりました。子どももわたしが、金魚を九匹もすくった、それに対しての拍手でした。大人からの拍手に誇らしい気持ちになります。一年間、この日のために金魚すくいを研究したかいがあったというものです。帰り道、ビニールの袋に入れた金魚を誇らしげに父と母に見せると、「その情熱の半分も勉強に向けたらどうなんだ」と、あきれ顔で言われました。しかし、その言葉はわたしの耳には入りませんでした。「来年は十匹以上すくってやる」、そう決心して、祭り会場の雑踏を背に、家路につきました。